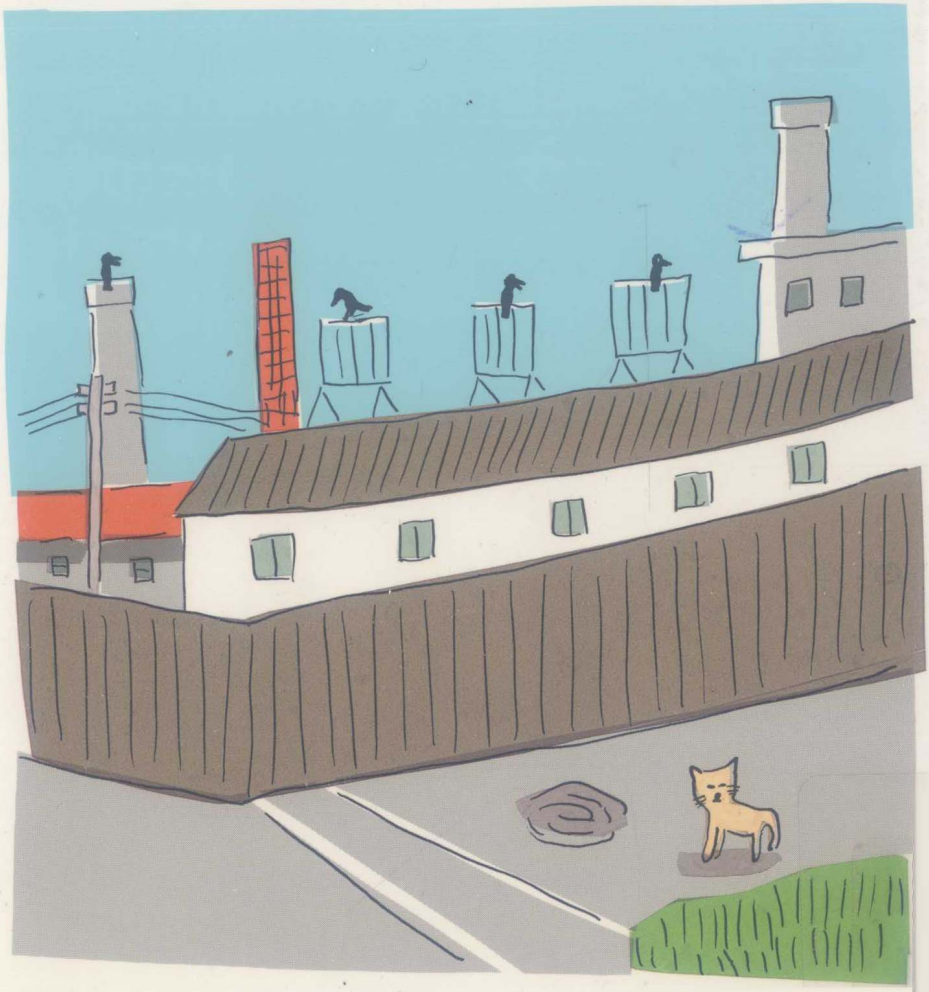
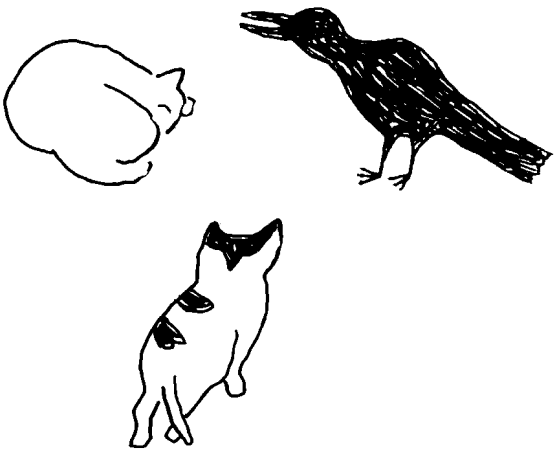
カラスも猫も

武田 花



カラスも猫も

武田 花



筑摩書房

武田花（たけだ・はな）
一九五一年東京に生まれる。写真家。一九九〇年、木村伊兵衛賞受賞。著書に、写真集『猫・陽のあたる場所』（現代書館）『眠そうな町』（IPC）、エッセイ集『煙突やニワトリ』（筑摩書房）がある。

カラスも猫も

一九九五年四月五日　第一刷発行

著者　武田花

発行者　森本政彦

印刷　明和印刷
製本　積信堂
発行所　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三
振替〇〇一六〇―八―四一二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三三一　大宮市櫛引町二―六四四　筑摩書房サービスセンター
TEL　〇四八―六五一―〇〇五三

© H. Takeda 1995 Printed in Japan ISBN4-480-81375-6 C0095

¥1500-

カラスも猫も

もくじ

昭和三十年代の思い出 …… 7
高い、高い、初体験 …… 10
噛まれたこと …… 13
＊
花も写真も日記 …… 17
＊
あの町この町日が暮れる …… 49
1　青森県Aホテル …… 50
2　お寺に行く …… 56
3　食堂で …… 61
4　名人――その1 …… 65

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

5 名人——その2 …… 70
6 清水まで …… 76
7 キャベツ畑 …… 80
8 千葉、海岸通り …… 85
9 海猫のいる港 …… 89
10 五合目の馬 …… 93
11 猫の写真を撮りに行く …… 98
12 年末の夜 …… 102

*

歩いて撮って …… 107
1 谷中の猫 …… 108
2 海と飛行機 …… 112
3 いつもの公園 …… 116

*

YURA YURAと……121

1 工場……122

2 犬……126

3 テレビ……127

4 飛行機……130

5 アヒル……132

6 豚……134

7 食堂……136

8 空地……138

9 鶏……140

10 入道雲……142

11 海……146

12　クリスマス……147
＊
夜の代々木公園……150
写真展の夜……154
埠頭まで……159
未来の気分……162
あとがき

装画・安西水丸

昭和三十年代の思い出

昭和三十年代、私は四歳から十四歳。十歳までは高井戸、それ以後は赤坂に住んだ。

高井戸の公団アパートは、周りが畑だった。小学校からの帰り道、駅から家までの十五分間に、どういうわけか、トイレにいきたくなる。その頃、公衆便所なんか滅多になかったから、必死で我慢して歩いた。やがてアパートの建物が見えはじめ、「もうちょっとで家のトイレだ、頑張るぞ」というところで、どういうわけか（気がゆるむのか）間に合わなくなってしまう。それが葱畑の中だった。長く伸びた葱の間にしゃがみこみ、ランドセルの重みで前につんのめりそうになりながら、用を足したものだった。そんなことがしょっちゅう出来るくらい、あの頃はのんびりしていたのだ。一度、すぐ脇の通り道を人が歩いて来る音がした。慌ててしゃがんだままの格好で、葱の間をずって行き、もっと奥に隠れた。歩いてきた人の足もとは、着物に革靴。神主さんのような、異国の人のような妙な

格好。そんな人は他にいないから、すぐ父だとわかった。その時は見つからずに済んだと思っていたが、数日して、「花子の奴、畑でウンコしてたぞ」父が母に言っているのが聞こえた。それからはもっと畑の奥で用を足すようにした。

で、その必死のトイレ我慢の間、私は、「雪之丞頑張れ、花之丞頑張れ、頑張れ花之丞……」と呟き続けていた。それは切羽詰まった時に、いつも私の頭の中に出てきてしまうおまじないのようなもので、当時、私は「雪之丞変化」をはじめとする、時代劇の大ファンだったのである。サイン入りの赤い扇子を持って映画館に通ったほど、はじめは東千代之介ファンだったが、昭和三十三年の東映映画「源氏九郎颯爽記」辺りから中村錦之助ファンに変わった。その凄い美剣士振りにうっとりと酔い、家に帰ると、ビニールの玩具の刀を使い、「秘剣揚羽の蝶」という殺陣の構えを炬燵の上で親に見せたりしていた。美空ひばりの男役映画も好きだった。雪之丞をひばりがやったこともある。殺陣が巧かった。映画館はいつも満員、時代劇全盛だった。売店で買ったベトベトの甘いのしいかと二色最中アイスを食べながら、チャンバラやお化け映画の三本立てを観ていた。

赤坂に引っ越してから、家の周りの環境ががらっと変わった。畑など殆どなく、黒塀の料亭が立ち並び、ドキッとするほどきれいな芸者さんが真っ昼間に顔を赤くして、酔っ払って歩いていることもあったし、夜になると、山王ホテルにいた進駐軍の米兵がぶらぶら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

歩いていたし、ホテルニュージャパンにはシャンゼリゼ通りを真似たという洒落た野天のカフェが出来たてだったし、賑やかでうきうきするような町だった（早く大人になって遊びたくなるような）。高い建物が殆どないから、銀座の明かりも東京タワーの灯も、マンションの二階の窓から見渡せた。

近所に紳士服の店があった。ショーウィンドーに飾られた背広が異様に大きく、やけに色が派手だった。誰がこれを買って着るのかと思っていたら、プロレスラーだった。赤坂に力道山の自宅だか事務所があったのだ。昭和三十八年、赤坂のクラブで力道山は刺され、それが元だったのか、間もなく死んでしまった。あんなに強い男でも、こんなにあっけなく死ぬのか……そのクラブ（コパカバーナだったか、ラテンクォーターだったか）の前を通る度、誰かが話していたことを思い出した。力道山は、本とか新聞を読むと、その夜の試合に負けてしまうのだそうだ。なるほどなあ、文字を読むと弱くなるのか、わかる気がするなあ……子供のくせに、妙に納得した。

高い、高い、初体験

食物で何が一番好きかと聞かれたら、迷わず私は「鰻重」と答える。

私が元気がなかったり、不機嫌だったりすると、「鰻でも御馳走しようか」と、夫は言う。途端に目がパッチリ開き、元気が湧いてくる。急いで服を着替え、化粧をし、夫の気が変わらないうちにいそいそと出かけるのである。（ウニャニだ、ウニャニだ、うれしいなあ）と、心の中で唄いながら。

私の鰻重好きを、「へええ、あなたはいつもお元気ですからねえ。成程ねえ」と、友人が笑ったが、鰻好きの女というのは、変に元気のあり過ぎる年増というイメージがあるのかもしれない。

子供のくせに、高い店で、いっぱしに大人に混じってカウンターに坐り、寿司だのてんぷらだの鰻重だのを食べている子供をたまに見かけるが、私が子供の頃は、家で出前を食

べさせて貰う以外、そういうものを食べたことがなかった。それも、父が家で一仕事終えた後、母に命ずる「おい、鰻とってくれ」のひと声があったときだけ。

中学生の頃、両親が田舎に行き、私一人で東京に居た時のこと。ある夜、ムラムラと鰻重が食べたくなった。出前を取ろうか……一人で取って食べても、何かつまんないなあ……そうだ、近所に有名な鰻屋があったっけ、あの店は出前をしないから食べたことはないが、いつも前を通ると、いい匂いがしてくる、行ってみよう、高そうだけど。しかし、板塀に囲まれた高級そうな店だから、普段着で行くわけにいかない。早速よそ行きに着替え、母の赤い口紅を塗り、おしろいを顔にはたき、せいいっぱい大人に見えるよう身繕いして出かけた。

鰻屋の玄関を入ると、和服姿の仲居さんが出てきたので、もう緊張してしまった。「ご予約は？」と聞かれ、「してないんですけど、近くに住んでて……ええと……」「おひとりですか？」「はあ……」「では、どうぞ」トントンと目の前の階段を仲居さんが上がっていくので、慌てて後をついていく。滑って転びそうにピカピカな廊下の先、小さな座敷に通された。ふかふかの座布団の上で、かしこまって待っていると、うっとりするような蒲焼きのいい匂いが、階段の下から立ち上ってくる（来て良かった……）。また仲居さんがや

ってきて、メニューを差し出した。ありったけのお小遣いを財布に入れてきたので、思い切って高いのを注文。それから、お茶を啜りながら待ったが、なかなか鰻は出来てこなかった。

きれいな絵が描かれた襖の向こうから洩れてくる、男女のひそひそ話す声。「鰻を食べながら男と女は別れ話をするんだ」そんなことを父が言っていたのを思い出し、耳を澄ます。しかし、どうやら別れ話ではなくて、仲良くしているらしかった。女の方が、わたし鰻が好きなのよ、とかなんとか言っていた。

待ちくたびれ、忘れられちゃったのではないかと心配し始めた頃、やっと鰻がやってきた。塗りのきれいな、高そうな重箱だ。「お嬢さん、何年生？　鰻がお好きなんですねえ。今度はご家族の方もご一緒に」などと話しかけてくる仲居さんが下がるのを待ち、緊張しながら蓋を開ける。出前で食べていたのと同じ外見だった。が、一口食べて（ああ来て良かった）、体がとろけそうにおいしかった。

私が一人で高い外食を食べた初体験である。その鰻屋には、あれから一度も行ったことがない。高いので。

噛まれたこと

両親が富士山麓に山小屋を建て、東京と往き来する生活を始めると、私も中学校の夏休みには山小屋へ行き、家族で夏を過ごした。十九歳の頃、野良の仔猫を拾い、飼いはじめ、その猫も車に乗せて山小屋へ連れて行くようになった。すると、それまでチーズの切れ端や胡桃や穀類を貰いにやってきていたリス達が姿を消した。猫のタマは山の生活に慣れるにしたがって、いろいろな生きものを捕えては、くわえて見せに帰って来るようになった。ネズミ、鳥、小さな蛇、モグラ。大の蛇嫌いの父は、タマが蛇をくわえてきたときは、見るや否や顔色を変え、部屋のしきりをバタンと閉めてとじこもり、母が死骸を片付けてしまうまで出てこないのだった。

傾斜した庭のあちこちにはモグラの穴があいていた。タマは地べたにお腹をペタリとすりつけて平たくなり、前肢を揃え、耳をピンと立て、穴の前で根気よくじっと待ち構えて

いる。やがて運の悪いモグラが一匹、うっかり顔をだす。タマは素早く飛びかかり、柔らかい前肢で押さえこみ、口にくわえる。食べるつもりも殺すつもりもないから、歯で傷つけないように、そおっと。キィキィと小さな鳴き声をあげながらもがくモグラをくわえ、意気揚々と家に帰ってくると、食堂の床にモグラを放す。モグラはよたよたと見えない目で必死に逃げていこうとする。それをわざと知らん振りして横を向き、お尻や足の裏を舐めたりしている。そしてモグラが二、三メートル程やっと逃げていったあたりで、突然身を翻して飛びかかり、前肢で押さえこんで、くわえる。これを繰り返すのが、えも言われぬ快感らしい。タマは、この時実に生き生きして、仔猫の頃のあどけない顔に戻り、毛並みまでつやつやしてくる。やがてモグラは、ぐったりとして動かなくなってしまう。

一度、モグラがあんまり気の毒になったので、逃がしてやろうとしたことがある。指先でモグラの首筋のあたりをつまみ上げ、掌に乗せると、見た目よりずっと柔らかく頼りない感触だ。怯えて小刻みに震えている。タマが気づいて怒り出さないうちにと、もう片方の掌で覆い囲って、急いで外に出た。もとの穴に戻してやろうと歩いて行くと、突然モグラが掌に噛みついた。針を突き刺したような痛み。あまりの痛さに手を開いたが、モグラはしっかりと目を瞑り、四肢をくねくねさせながら、尖った口先で皮に噛みついたままぶら下がり、手を振っても離れようとしない。皮がちぎれるのかと思った。モグラの少し開

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com